

元和6年上京大火 —出土した茶陶—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

2013年、京都市上京区今出川通室町西入堀出シ町で、上京区総合庁舎の建設に先立って発掘調査を実施しました。ここは平安京の北に位置し、『京都市遺跡地図台帳』では、室町時代の上京遺跡および室町殿（花の御所）跡にあたります。

上京遺跡は、禁裏がほぼ現在の京都御所に固定された室町時代以降に、將軍家や公家の屋敷、寺院などが平安京の枠を超えてその北方に形成された市街地で、江戸時代初期には、皇族・公家・武家・有力町人など多くの人々が住んでいました。烏丸通より東には禁裏御所・公家町があり、門跡寺院・武家屋敷も点在していました。さらに、茶道の表千家・裏千家・武者小路千家や、本阿弥家・尾形家・樂家などの美術工芸を家業とする人々も生活しており、賑わいを見せていました。

京の都で大工頭を務めた中井家作成の『洛中絵図 寛永後萬治前』によれば、調査地の北半部は武家「長谷川半兵衛」の屋敷地があり、南半部は町屋があったことが分かります。調査地の約30m北には伏見奉行や作事奉行を任せられ、大名茶人としても有名な小堀遠州の屋敷地がありました（図1）。

『土御門泰重卿記』『孝亮宿禰日記』『義演権后日記』『耶蘇會日



写真1 江戸時代初期の土坑から出土した土器類



写真2 江戸時代初期の遺構（1区 南東から）



図1 江戸時代初期の調査地周辺

『洛中絵図 寛永後萬治前』（京都大学附属図書館蔵 中井家旧蔵）を現在の地図に重ねた

『本年報』などの公家・僧侶やキリシタン宣教師の記録には、調査地を含む上京一帯の大火災の記載があります。元和6年（1620）2月30日、放火のため新町から出火し、火の手は瞬刻間に広がり、相国寺や御所八幡町にあった聖護院（焼失後、岡崎に移転）や堀出し町（調査地）など、上京域で約2,000軒が焼失しました。その後も放火は続き、4日後には更に約1,000軒が焼失しています。時は大坂夏の陣が終わり、天下が徳川に移って間もない時期だけに、京の都を震撼させる連続放火事件でした。

調査では、大型の土坑（穴）を7基検出しました。これらの土坑は、埋土に大量の炭や焼土・壁土・焼瓦を含んでいることから、火災後の後片付けをしたゴミ捨て穴と考えられます。

調査地は、西側が現在の新町通、南側は旧今出川通（北小路）、東側は衣櫛通に囲まれ、それぞれの通りから最も奥まった場所に位置し

ています。このことから、通りに面した敷地・建物の裏手にあたる空閑地に、火災後の処理土坑がたくさん掘削されたと考えられます。

最も大きな土坑は、東西3.6m、南北4.9m、深さ2.0mの規模で、遺物が整理箱に16箱分出土しました（写真1・2）。その内容は、土師器・瓦器・施軸陶器・焼締陶器・国産磁器（初期伊万里）・輸入陶磁器などで、中には高熱を受けて焼けただれたり、変形しているものも見られます。

焼物の産地として、唐津（佐賀県）・高取（福岡県）・備前（岡山県）・丹波（兵庫県）・信楽（滋賀県）・美濃（岐阜県）・瀬戸（愛知県）など、国内各地のものがあり、奈良産の土師質土器や地元の京焼などもありました。さらに、中国・朝鮮半島・安南（ベトナム）などの海外から輸入された白磁・赤絵・青花などの陶磁器類も含まれています。

また、器の種類には、天目碗・

皿・向付・鉢・水指・茶入・壺・汁注ぎ・懐石具など、茶事に使用される器が多く見られ、美濃・瀬戸の製品には、黄瀬戸・志野・織部など的高级品が含まれていることが注目されます。これらの遺物の特徴が江戸時代初期（1600年～1630年頃）に位置付けられることから、元和6年の火災の後に廃棄されたものと考えられます。

火災の記録と出土した遺物の年代が合致したことにより、これらは、元和6年当時上京の住人たちが使用していた食器類であり、武家屋敷・町屋ともに、いわゆる茶陶類を多く所持していたことも分かりました。

武家屋敷（調査地2区）では、赤絵・青花など輸入陶磁器の出土比率が高く、瀬戸黒茶碗が印象的です。大皿や揃い物椀・皿があることから、広間で大勢の客をもてなす暮らし振りが窺えます。

一方、町屋（調査地1区）でも高級品である黄瀬戸・志野・織部などや、輸入陶磁器を所持していることから、高い経済力を持っていたことが分かります。両者の所持する陶磁器類には、階層や好みの違いなどが反映されていると推定されます。

出土した食器類の中に、いわゆる茶陶類が多く見られることから、茶の湯が住人の日常生活の中に取り入れられていたとみられます。この調査によって、江戸時代初期の上京町衆が豊かな経済力を持ち、文化的な暮らしをしていたことを窺い知ることができました。

（小椋山一良）